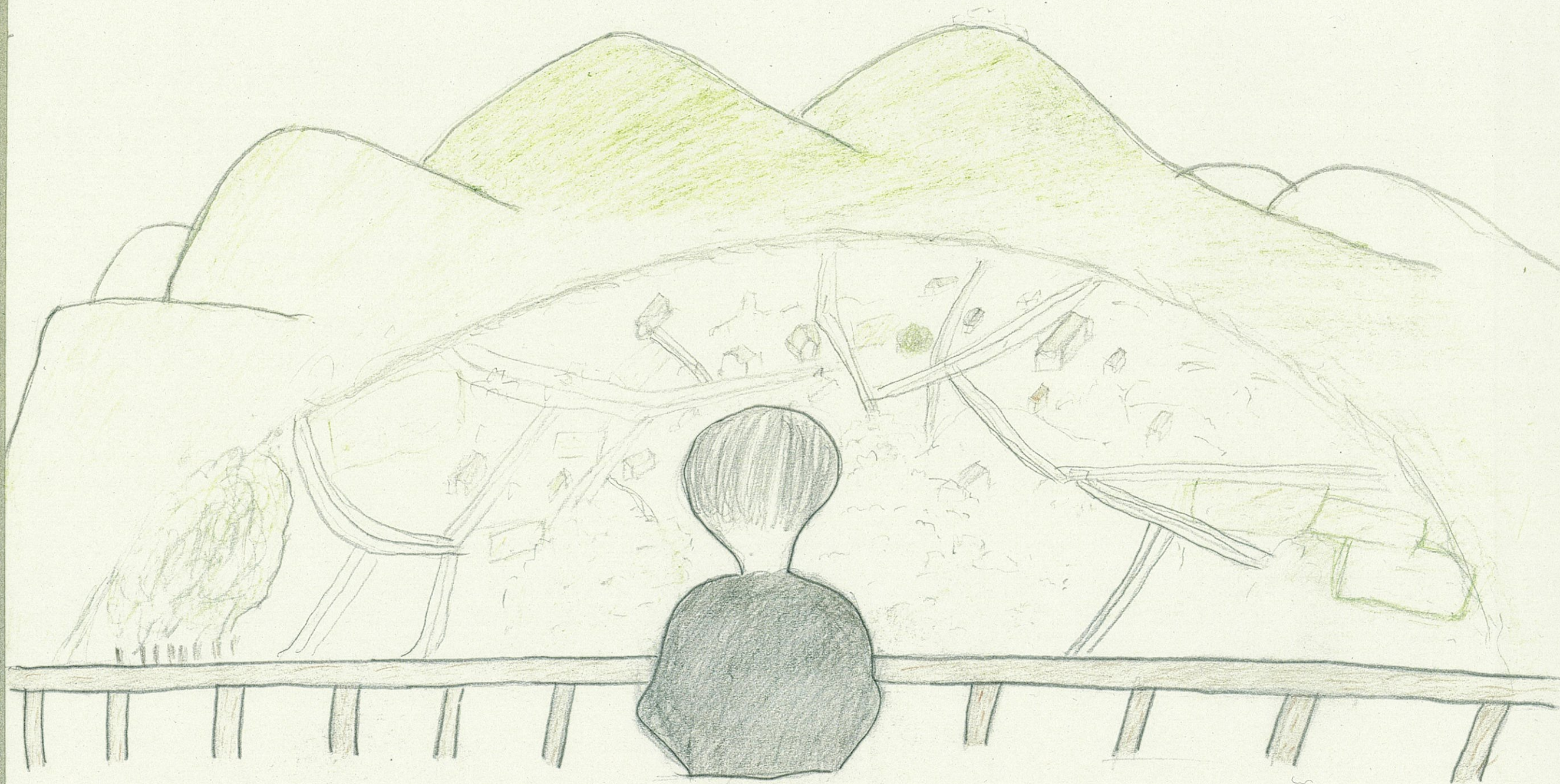


ぼくとおれと

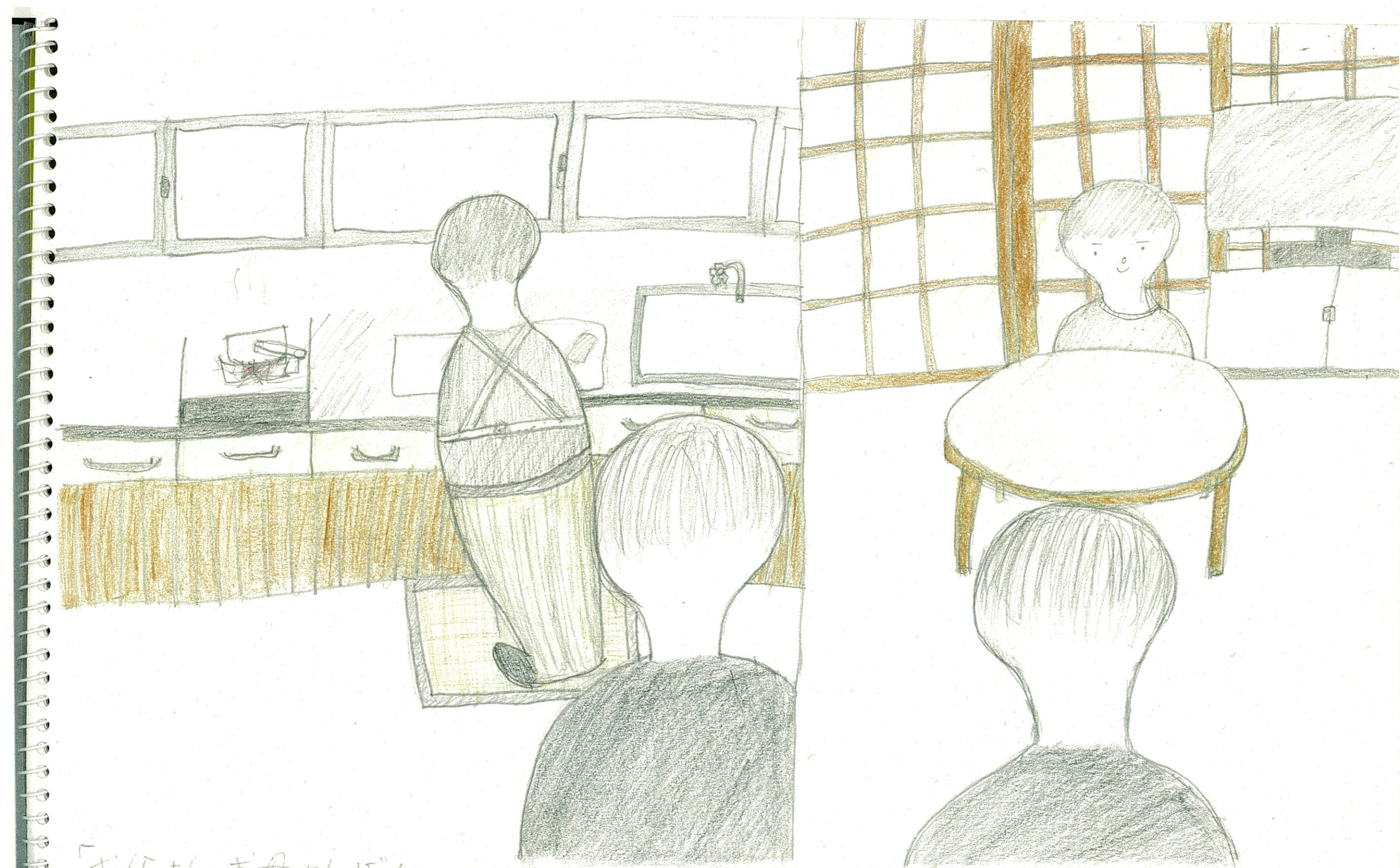
『小さなまち』と『大きなまち』



渡辺小太郎



ぼくはこの「小さなまち」が大好きだ。だからこの「小さなまち」にずーっといたい。



「お父さん、お母さん、ぼく、このまちにすー、といたいよ。た、とすごくいいまちなんだよ。」

「そうね。けれど一度あまなまちに行くこともいいことだと思うよ。」とお父さんとお母さんは言った。

ぼくはともだちに

きいてみた。

「ぼくはこの

『小さなまち』が好きで

どこへも行きたくは

ないんだ。

君はどう？」

「ぼくはこんな
『小さなまち』を出て

『大きなまち』へ
行きたいよ」



ぼくは『小さなまち』のおじさんに聞いて
みた。

「おじさんは、『大きなまち』へ行、た
ことはある？」

「ああ、あるさ。
けれど、あんな所へは
いかなくてもいい
んだよ。」



ぼくはずーとかんがえた。

ごはんのときも



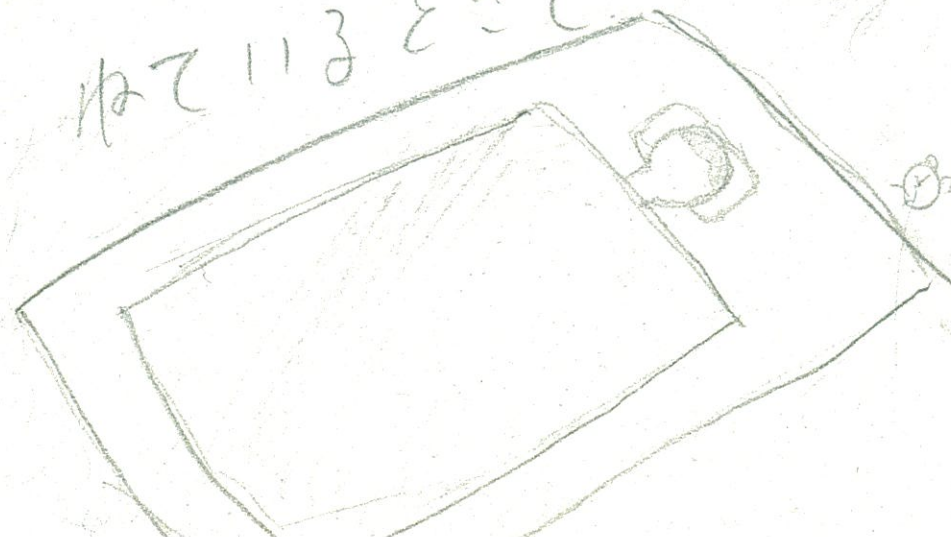
うんどう
しているときも



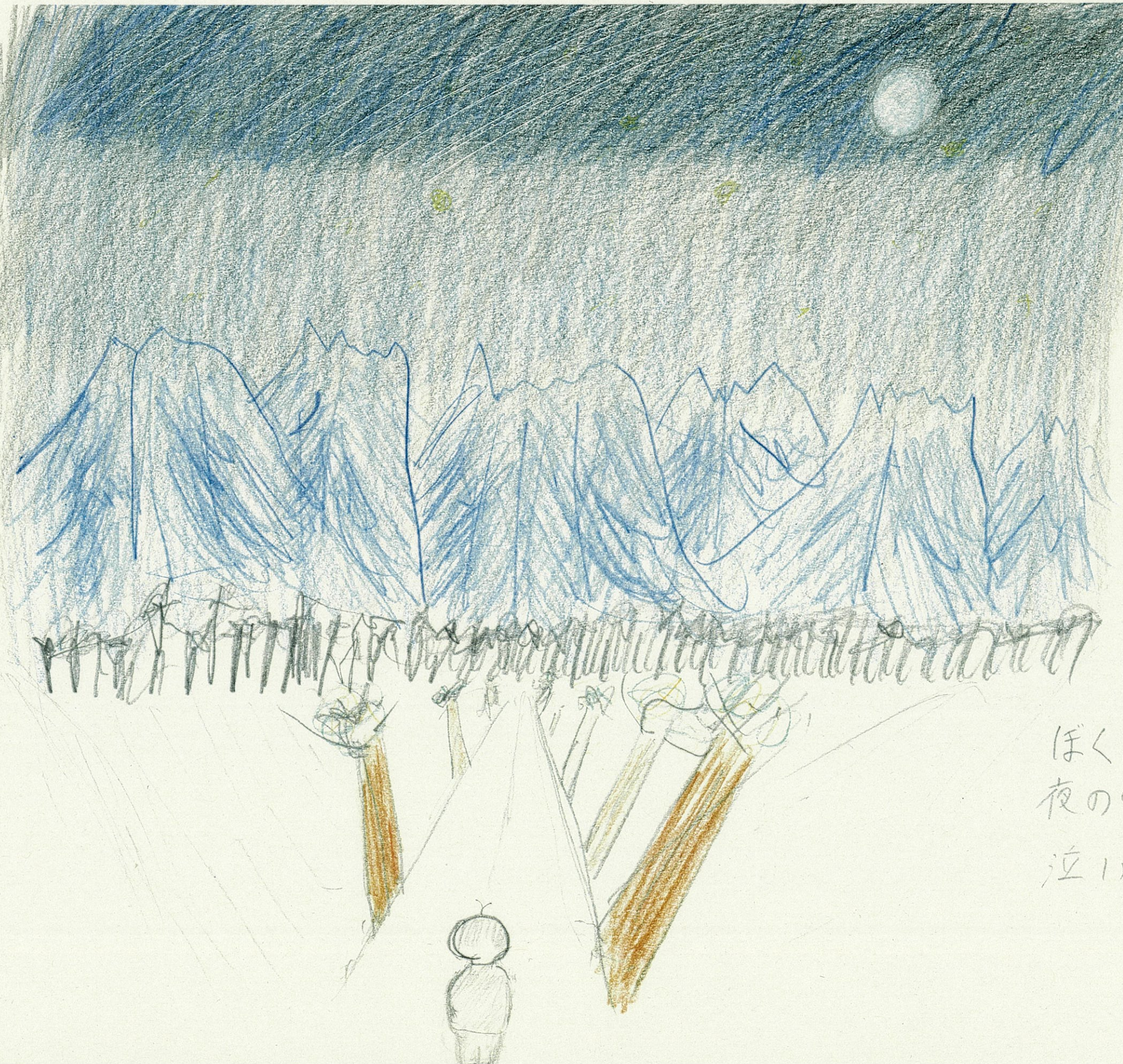
本をよんでいる
ときも



休んでいるときも



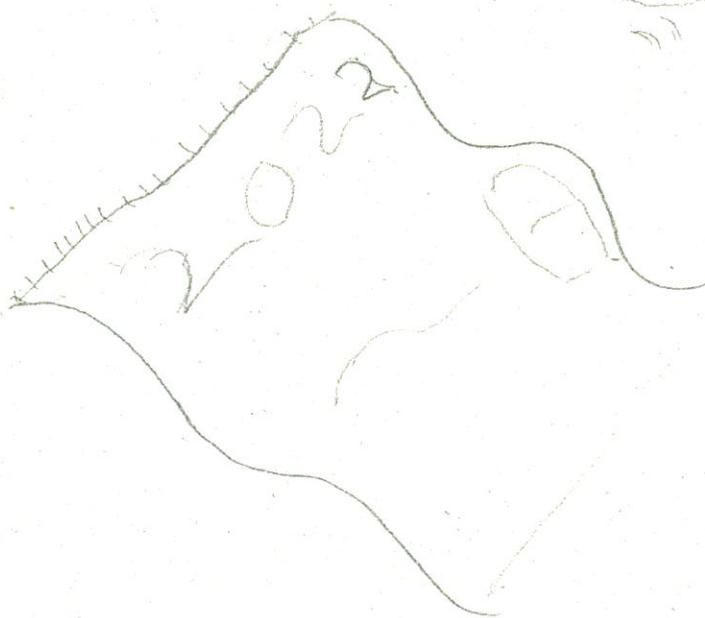
お風呂のときも



ぼくは
夜の空を見なが
泣いた。

~~~~~

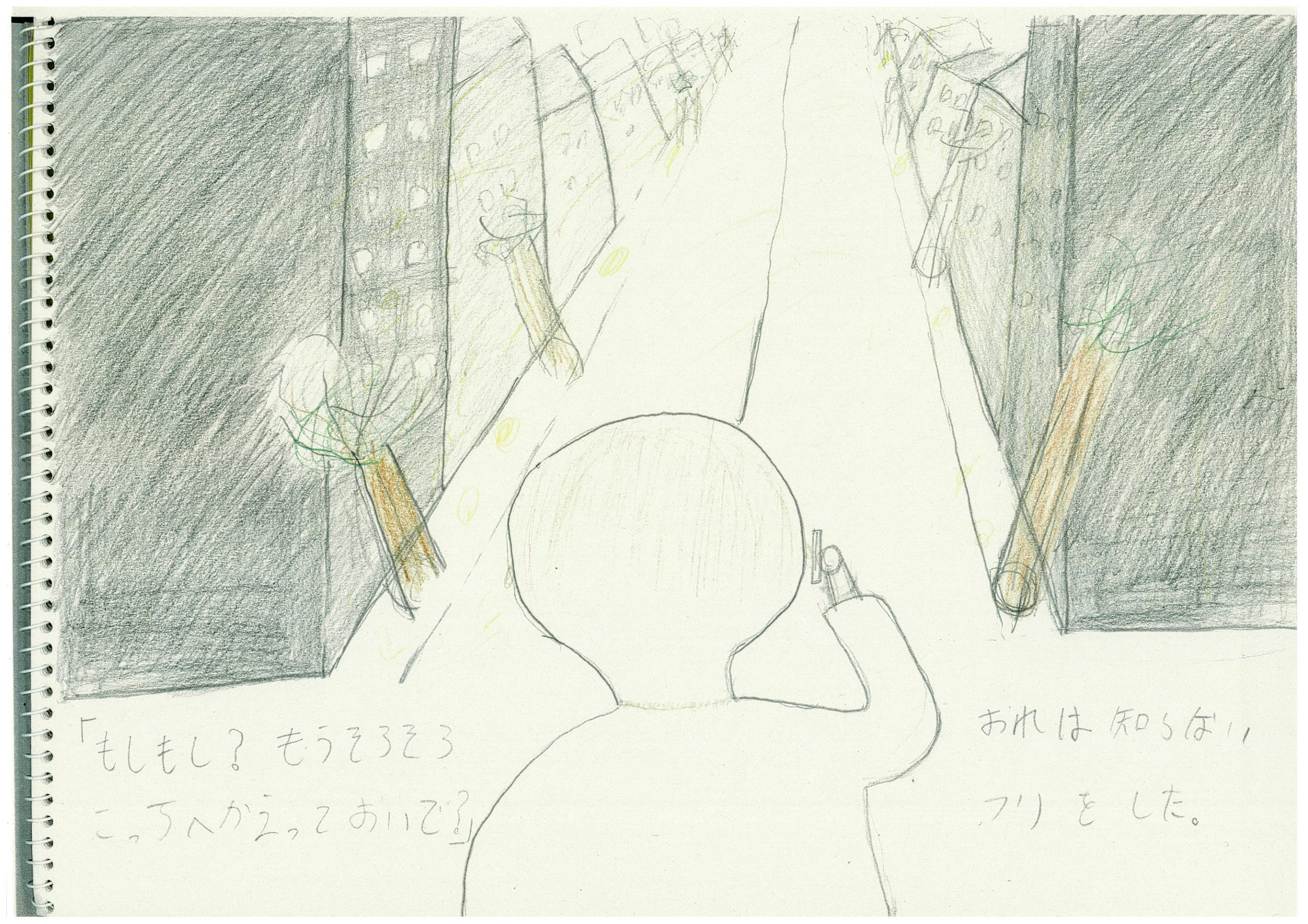
2026年



11



11

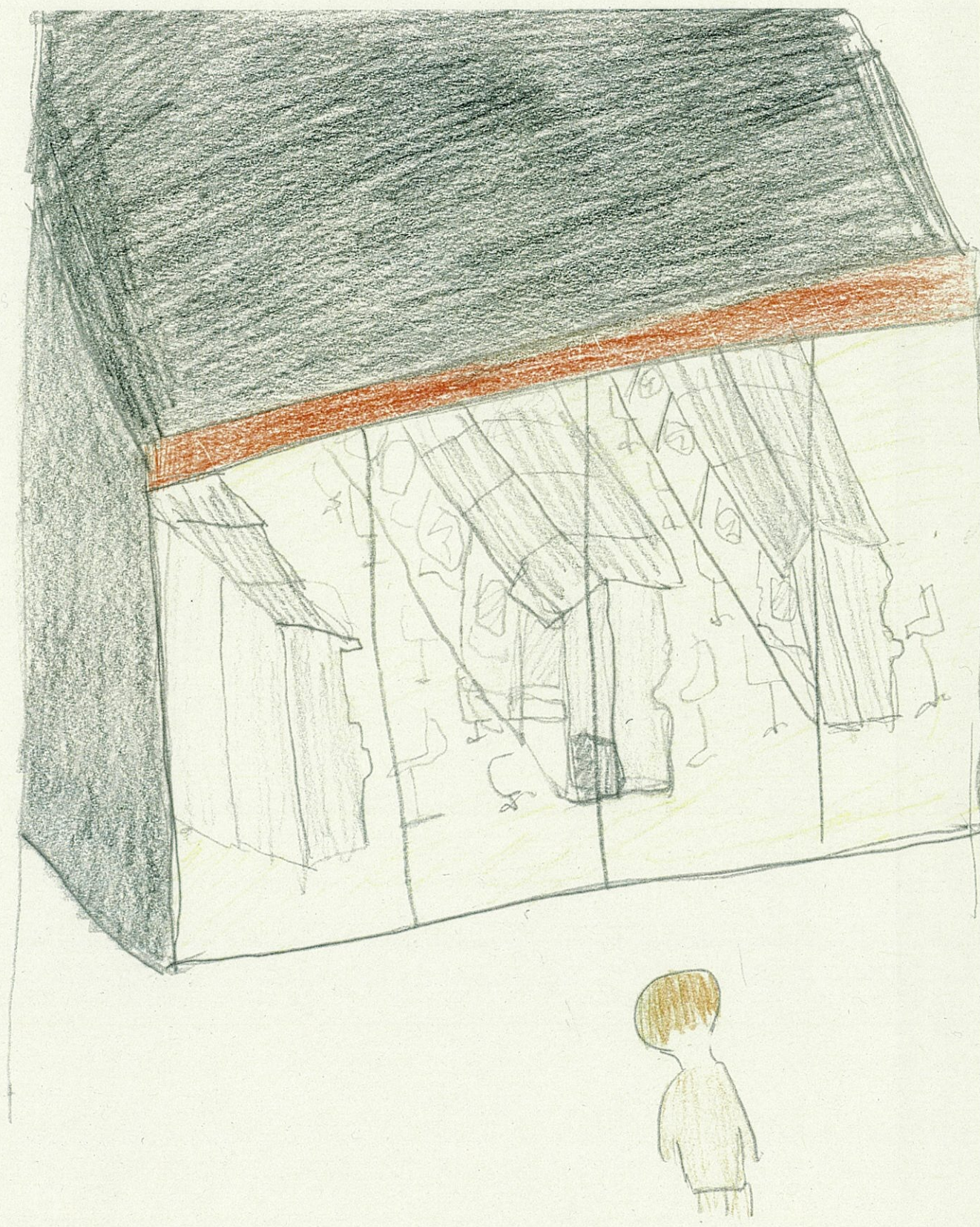
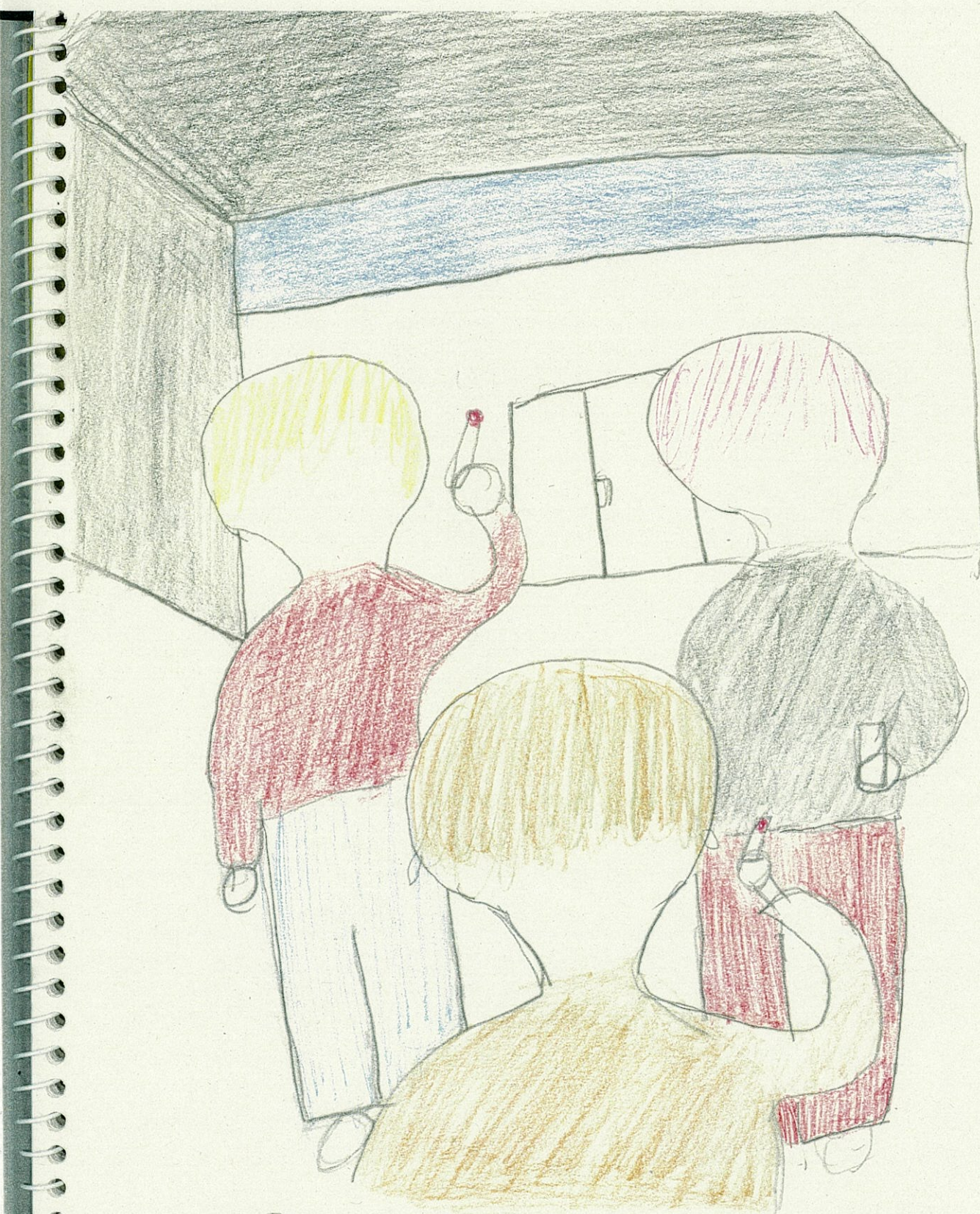


「もしもし？ もうそろそろ  
こっうへかえっておいで？」

おれは知らない、  
フリをした。



おれはこの『大きなまる』が大好きだ。  
だからあの『小さなまる』には帰らない。



この『大きなまち』には、友達もたくさんいるし、  
あの『小さなまち』にはないものしかない。



だからおれはこの『大きなまち』が大好きだ。けれどおれの  
好きだったきれいな自然はない。もちろん星たちも。



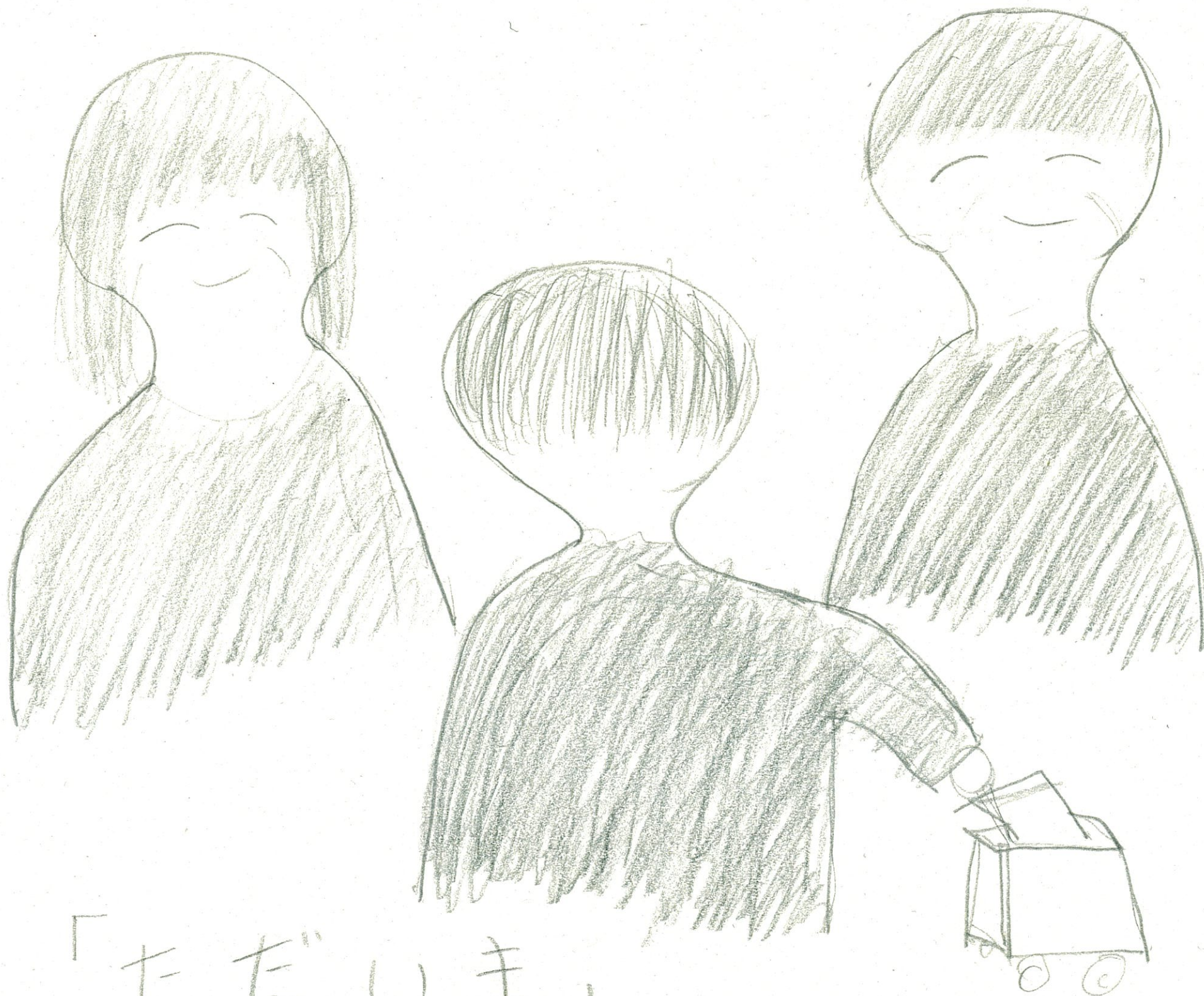
ある日 友達はいった。

「あの小さな町は全然 たのしくもないし、二度と帰えりたく  
もないよ。」 ぼくはなぜか たのしくなった。



おれは帰り道 空を見上げた。そこには星はなかつた。  
「帰ろう。」

「おかえり」



「ただいま」